筑紫女学園大学リポジト

ITを活用した古典文学教育の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐島, 薫子, 古賀, 典子, 安永, 美恵, KIRISHIMA, Kaoruko, KOGA, Noriko, YASUNAGA, Mie メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/297

ITを活用した古典文学教育の研究

桐　島　薫　子・古　賀　典　子・安　永　美　恵

The Utilization of Information Technology in Japanese and Chinese Classical Literature Education

Kaoruko KIRISHIMA, Noriko KOGA and Mie YASUNAGA

はじめに

近年、情報化・グローバル化が進み、中国古典文学と日本古典文学（古代文学・近世文学）の各専門領域も、急激にIT（インターネット）関連の情報が充実発達してきた。しかし、それらの情報を研究のみならず、教育方面において相互に活用することについては、いまだ充分な進展を遂げたという段階には至っていない。こうした中、ITを活用する教育技術を相互に連携して開発し、その結果を実際の中国・日本古典文学教育実践の現場で生かしていくことは、大学における古典文学教育の先進的な方法を開拓することになると同時に、日中古典の比較文学研究の分野においても、大いなる寄与ができると期待される。

筑紫女学園大学日本語・日本文学科文学分野では、古代から現代までの日本文学と中国文学について、基礎から応用までの体系的な科目群を配置し、その中でITを活用する先進的な方法を取り入れて受講生の勉学意欲を刺激し実社会に出てから活躍できる能力の幅を広げてきた。そして、こうした教育の効果の一端として、例えば、専門職である中学・高等学校の国語科教員に関しては、教員採用試験の現役合格者を輩出し、多くの卒業生が常勤・非常勤講師として活躍するようになった。また、卒業論文に関しては、学科発行雑誌『筑紫語文』に掲載された優秀な論文が、学部生の論文としては研究者から高く評価され、貴重な論文の収集を行っている「論説資料保存会」から転載の要請が寄せられるという状況が続いている。

そこで、本共同研究はこうした成果を踏まえつつ、IT活用の教育方法の共有化を図って斬新かつ有効な古典文学の授業方法・研究方法の開発をより一層進めるために、それぞれの関連学会や研究会におけるIT活用の事例の情報収集を行うと同時に、CD-ROMやITで頒布される当該分

野データーの充実を図り、これらを共同で分析・検証し、授業や論文指導に実践的に応用しながら研究を進めた。本報告書は、その取り組みを報告するものである。内容は、Ⅰ 中国文学分野(桐島薫子)、Ⅱ 日本の古代文学分野（古賀典子)、Ⅲ 日本の近世文学分野（安永美恵）によって構成されている。

Ⅰ　中国文学分野

1　先行研究と本論文（中国文学分野）の目的

①「全国漢文教育学会」における実践教育及び漢籍デジタル化の報告

初期段階の漢文教育におけるIT活用として、下記の⑴～⑷は、ITの利用方法・ワープロソフトを使った多漢字利用の方法・全国漢文教育学会HPの紹介などを行っている。また、⑸は、懐徳堂（1724年、大坂の地に創設された学問所）の資料のデジタルコンテンツ化に関する紹介である。

⑴西口智也「漢文教育におけるインターネット利用について―全国漢文教育学会ホームページの開設にあたって―」(『新しい漢字・漢文教育』31号　2000年)

⑵田口昌弘「漢文教育におけるパソコン利用について―第１回　テキスト入力初級編（テスト問題の作り方）―」(『新しい漢字・漢文教育』32号　2001年)

⑶田口昌弘「漢文教育におけるパソコン利用について―第２回　テキスト入力中級編（新字旧字と文字鏡番号をチェックする）―」(『新しい漢字・漢文教育』33号　2001年)

⑷田口昌弘「漢文教育におけるパソコン利用について―第3回　全漢教HP学術リンク集―」(『新しい漢字・漢文教育』34号　2002年)

⑸湯浅邦弘「懐徳堂デジタルコンテンツの展開―古典籍資料の電子情報化について―」(『新しい漢字・漢文教育』35号2002年)

② ITを活用した中国学・国文学の工具書と関連学会

下記の⑴⑵は、パソコンで漢字・中国語を扱えるようにするマニュアル・漢籍データベース（台湾中央研究院「寒泉」・「漢籍電子文獻」、北京大学中文系「全唐詩電子検索系統」など）の紹介、⑶は、国文学データベース（国文学研究資料館HP、東京大学資料編纂所HPなど）の紹介。⑷は、最新の情報や議論を紹介している研究会HP。

⑴漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学』(好文出版　1998年11月)

⑵同上『電脳中国学Ⅱ』(好文出版2001年11月)

⑶同上『電脳国文学―インターネットで広がる古典の世界―』(好文出版 2000年10月)

⑷漢字情報処理研究会のHP（http://www.jaet.gr.jp/）

③本実践報告の意義

上記①では、管見する所、その後、現時点までに大学でのITを活用した古典文学教育の

具体的実践例は報告されていない。また、上記②に関しては、その後、情報化技術の発展と同時に、膨大な漢籍CD-ROM化（注１）も進み、研究面でのITや電子化資料の活用が益々盛んになってきた。そこで、本研究では、本学の大学生及び大学院生へのITを活用した古典文学教育の一部について報告を行い、併せて今後の課題や展望について考えてみたい。

２　本学におけるIT活用の実践教育（①大学科目、②大学院科目、③課外授業）

①大学 日本語・日本文学科専攻科目「中国文学演習Ｉ」(対象３年生)

（１）授業の概要（目的を含む）

唐代の詩人李白と杜甫を取り上げた。授業の進め方は、全体講義の後、受講者が担当作品に関する資料を収集・検討して発表、途中、パソコン演習室でのスポット授業でITの活用方法(漢籍データベースの検索とワードによる漢文訓点入力)を教授した。スポット授業では発表資料（レジュメ）作りに役立つ即戦力や実践的な漢字・漢語能力を身につけることを目標とした。

（２）授業スケジュール

第１回	１）ガイダンス（授業の概要とねらい)、２）取り扱う作品集のプリント配布
第２回	１）担当作品を決定、２）発表レジュメの作り方・発表の仕方について説明
第３回	１）担当作品確認及び日程表を配布、２）全体授業：詩歌概論（六朝まで）
第４回	パソコン演習室でのスポット授業
第５回	１）全体授業：詩歌概論（唐代、近体詩のきまり)、２）視聴覚教材
第６回	１）発表に関する説明と質疑応答、２）各自（或いは、グループ）発表準備
第７～14回	発表開始。各回、数作品ずつ
第15回	レポートに関する質疑応答・ディスカッション

（３）上記「授業スケジュール」第４回「パソコン演習室でのスポット授業」の内容

教員が下記a ～ cの説明とデモンストレーションを行った後、受講生はdの課題に取り組む。

a．漢籍データベースである台湾故宮博物院「寒泉」の活用。(注２)

b．発表やレポートの学術的資料収集のための論文情報ナビゲーター「CiNii」、図書館情報ナビゲーター「Webcat.plus」、「日本中国学会」、「全国漢文教育学会」などのHP。

c．ワードによる漢文訓点入力と「e漢字」HP（http://ekanji.u-shimane.ac.jp/)（島根大学のフォント提供サービス）の活用。

d．受講生が取り組む漢籍データベース演習の課題内容

1、李白の作品中､｢春｣を含む詩が何筆（何首）あるか。また､｢春｣の検索結果の二番目に来る作品名と、その作品中「春」を含む一句を書き出す。
（1)｢春｣を含む作品数､(2)(1）の検索結果の二番目に来る作品名と「春」を含む一句
2、李白の作品中､｢陶淵明｣を含む詩が何筆あるか。
3、杜甫の作品中､｢春｣を含む詩が何筆あるか、また、その二番目に来る作品の名は何か。
（1)｢春｣を含む作品数､(2)(1）の検索結果の二番目に来る作品名
4、杜甫の作品中､｢陶淵明｣を含む詩があるかどうか、調べる。
5、『全唐詩』全体の中で､｢李白｣と「杜甫」を含む詩が、何筆あるか。
6、自分の担当する作品を検索し、その結果を発表資料に活用する。
7、「筑女ネット」の「ワードで漢文入力の練習」で実際に訓点入力を行ってみる。

（4）上記（3）に関する受講生へのアンケートと結果（回収54）

①授業で学んだ漢籍データベースは役に立ちましたか？（下記の該当するものに〇印）
活用した　・　活用しなかった

アンケート結果：活用した　36名、活用しなかった　他　18名

②活用した人は、具体的にどのように活用しましたか？

アンケート結果：a．レジュメ作成（原文の検索、原文の打ち出し、訓点付け）
b．テキスト異同の参考資料の収集や漢詩の調査。
c．「寒泉」を使ったキーワードの検索。
d．他の授業でも活用している。

③その他の感想（自由記載）

アンケート結果：a．他のレポートでも役立った。
b．新しい知識を得、新しいスキルを身につけることができた。
c．実際に使ってみてとても便利であると思った。
d．授業での説明が分かり易くすぐに発表資料に活用できた。
e．スポット授業での時間が足りなかった。
f．スポット授業を一回増やしみっちり作業を取り入れても良い。

（5）今後の課題

a．アンケートからIT上の資料を積極的に参照・引用する傾向が見られた。こうした状況を踏まえ、HPの信頼度を識別できる選別眼を持たせることがより重要となる。

b．レジュメには、テーマを決めて漢籍データベースを検索し新しい問題を発見した事例があった。一方で、アンケートで「活用しなかった」と回答した学生たちもおり、こうした状況を改善するためにも、アンケート③のe、fの回答を今後の改善に役立てたい。

c．習得したスキルや知識を教育実習で活用する学生も出ており、全国漢文教育学会HPの「国語教材データベース」についても、より詳しい資料や説明を組み入れる必要がある。

d．上記「中国文学演習Ⅰ」におけるIT活用を基礎として、「中国文学演習Ⅱ」では『大漢和辞典』や『漢語大詞典』活用の実践と併せて漢籍データベースを用いた語彙の意味確認といった辞書的活用方法の説明を加え、「卒業論文」では漢籍の範囲を十三経・先秦諸子・二十四史などに広げて関連作品への理解を深めるというように、段階的なレベルアップを試みている。科目間のこうした連携もより充実させていきたい。

②大学院 人間文化研究科「修士論文研究指導」

修士論文では、学際的研究へと足場を広げ、文献資料やそれらと関連した文物（出土物や絵画など）の考察に取り組んだ。修士論文は、オリジナル性を有し客観的な資料を用いた論理的で説得力ある内容に仕上げることが求められるため、原典の検索は重要なプロセスとなる。そこで、2009年の審査に合格した修士論文（佐伯春恵による）について漢籍及び国文学データベースの利用に焦点を当て紹介していく。

（1）台湾中央研究院「漢籍電子文獻」(http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/)

佐伯論文は立岩遺跡出土「清白鏡」の銘文に見られる『楚辞』の引用例について、先行研究にこのデータベースを用いた独自の検索結果を加えて考察し、銘文には『楚辞』「九章」「九弁」からの引用が多いことを発見し卒業論文にまとめ、修士論文ではさらに『懐風藻』における『楚辞』「九弁」の引用例と比較して「清白鏡」銘文の内容と歴史的意義を述べた。(注３)考察の中心は、中国文学と博物館学芸員実習で知った「清白鏡」であったが、関連する日本文学関連の資料収集に際しては、本報告「Ⅱ 日本古代文学分野」(古賀論文) に紹介されている授業で学んだ検索スキルを活用したり、「Ⅲ 日本近世文学分野」(安永論文) に紹介されている授業で身につけた書誌学の知識を活かして積極的に貴重図書の閲覧を行ったりしている。

（2）東京大学資料編纂所「奈良時代古文書フルテキストデータベース」

『大日本古文書』データベース(http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller)。『大日本古文書』は、大宝２年（702）～宝亀11年（780）の古文書を網羅的に収録するもので、検索結果からは刊本のイメージを閲覧することが可能である。佐伯論文で

の使用目的は、『楚辞』の日本への伝来に関する最も古い記録としては、『大日本古文書』の天平２年（730）７月４日の写書雑用帖正倉院文書があることを述べ、その参照資料として紹介している。

３　本学における実践教育の紹介（課外授業）

学生による漢字・漢語力アップのための勉強会を主催し、中国文学・漢字文化の勉強会HP（http://www.geocities.jp/sottaku59/index.html）の開設・運営の支援を行った。目標レベルはJIS第１水準漢字、漢字能力検定では「準１級」レベル（約3000字の漢字を読み、大体が書ける。故事成語・諺を正しく理解する）を設定、検定試験には16名が合格している。指導方針は、丸暗記ではなく、漢字の成り立ちや漢文句法を活用した二字・四字熟語の理解・故事の歴史背景の把握などを取り入れている。（注４）

（１）HP及びeラーニングによる学習サポートシステムの構築

先輩の学生や卒業生が、後輩にHPを通じた学習サポート（合格体験記・掲示板を使った質疑応答・オモシロ学習法の紹介など）ができるシステムを作っている。また、配当漢字が使われる文化遺産や植物（例：蒔絵・柊）を学べるHPも紹介し、漢字の学習から歴史・文化へと興味を広げ、その興味が漢字学習の意欲を高めるという相乗効果が出るよう配慮している。加えて、国語科の教員をしている卒業生の要請を受け、中学生や高校生のHPの活用や掲示板利用などのサポートも行っている。

（２）社会との連携及び社会への貢献へ向けた試み

勉強会のHPには、2004年２月18日から18000件を超えるアクセスがある。また「NHK放送文化研究所」の「日本語プロジェクト」より、漢字への関心を高めるため勉強会のHP上で同研究所「国語力テスト」を紹介することの依頼を受け、同研究所のメッセージをアップしリンクしている。さらに、社会人・中学生・他大学の学生・院生・民放全国放送のクイズ番組制作会社からメールで寄せられた質問に可能な範囲で対応している。さらに勉強会の参加者の中からは、小学校や出身高校で漢字学習サポートをボランティアで行う学生も出て来ている。

以上が、中国文学分野の本における「ITを活用する古典文学教育」の実践報告と今後の課題である。

注１　例えば、「雕龍-中国古籍全文検索叢書シリーズ」（凱希メディアサービス）などがある。
２　故宮博物院「寒泉」（http://210.69.170.100/s25/index.htm）
３　修士論文は本誌に掲載されている佐伯春恵「立岩遺跡出土「清白鏡」及び銘文に関する一考察―『楚辞』「九弁」の引用を手がかりに―」参照。卒業論文は2007年11月発行『筑紫語文』16号所

収の他、論説資料保存会『中国関係論説資料』51号所収予定。

4　詳細については、拙論「大学に於ける国語教育について－漢字・漢語の系統的学習の必要性－」(全国漢文教育学会誌『新しい漢字漢文教育』46号 2008年5月）参照。

（以上、担当：桐島薫子）

Ⅱ　日本古代文学分野

1　本学におけるIT活用の実践報告

筆者（古賀）は、2000年（平成12）７月27日の学内談話会で、「開かれる専門性―『源氏物語』演習の情報機器利用―」と題して、担当する「古代文学演習Ⅰ」講義でのIT活用例を報告したが、その折に使用した当時のシラバスには、「発表のための下調べに、パソコンを使った情報検索などを取り入れる。そのために、授業の最初の頃に、『新編国歌大観』のCD-ROMなどを使った情報検索の実習をする」と書いており、その報告レジュメの最後に、「将来、教室でのインターネット利用が可能になれば、疑問が生じた時に即座に国文学研究資料館のデータベースなどにアクセスして、研究論文などの検索もできるようになる」と記している。それから10年を経て、既にネット接続可能な教室での講義・演習が可能になった。この間にカリキュラムの変更もあり、「古代文学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」であった古代文学演習の構成が、現在では「古典文学基礎演習」「古代文学Ⅰ・Ⅱ」の構成になっており、「古典文学基礎演習」の中でIT関連の基礎的な知識とスキルも学ぶようにしている。その大要を以下に紹介する。

①大学 日本語・日本文学科専攻科目「古典文学基礎演習」(対象２年生）での実践

（１）授業の概要（2009年度シラバスより抜粋）

古典文学の有名な作品の冒頭の写本（影印本）コピーと、それを解読し解釈するために必要な文献についてのプリントを準備して、写本文献を読む課題を出す。演習時に指名された学生がOHCを利用して読む。写本読み課題と並行して、古典文学に関する書籍の利用の仕方や学術論文の検索の仕方や演習発表に際して利用するIT利用の方法などを体験する。

（２）授業スケジュール

第１回	授業進行のガイダンス　、テキストの利用の仕方について	講義	プリント①~③
第２回	『源氏物語』桐壷の巻冒頭の写本読みと暗記		
第３回	『枕草子』冒頭の写本	演習	③提出、④~⑥
第４回	『枕草子』暗記、情報検索（書籍利用編）の方法（プリント）		⑥提出、⑦⑧

第５回	『更級日記』冒頭の写本	演習	⑧提出、⑨⑩
第６回	写本読みミニテスト、『更級日記』冒頭暗記		⑨提出、⑪
第７回	「百人秀歌」「古今和歌集」など和歌写本の解読・解釈 『国書総目録』の利用の仕方と書籍検索（プリント）など		
第８回	情報検索（パソコン利用編）の方法（プリント）		⑪提出、⑫⑬
第９回	古典文学の情報処理演習（情報処理演習室での実習）	実習	
第10回	『建礼門院右京大夫集』冒頭の写本（インターネット参照も）	演習	⑬提出
第11回	古典文学情報処理についての実習報告		実習報告書提出
第12回	『和泉式部日記』冒頭の写本		⑭⑮配布
第13回	『和泉式部日記』冒頭の暗記と写本読み		⑭提出
第14回	全体の復習と講評、授業評価		
第15回	総括、定期試験	講義	

（３）上記「授業スケジュール」第９回情報処理演習室での授業内容（配布プリントより抜粋）

1　古典文学関連の研究論文の検索

①筑紫女学園大学付属図書館HP→②学術情報リンク集→③国文学研究資料館電子資料館（書誌・目録データベース他）→④国文学論文目録データベース→ 検索画面 →検索キーワード入力

(例)『枕草子』の「木の花」についての論文を調べる

〇枕草子→2546件→（絞り込み)「木の花」→10件→

＊「枕冊子三十五段「木の花は」について」(掲載誌名『枕草子探究』1980/12)

→⑤筑紫女学園大学付属図書館HP→⑥図書館資料の検索→⑦ 枕草子探究 入力→

＊「木の花は（枕草子)」(掲載誌名『国文学解釈と鑑賞』1939/03)

→筑紫女学園大学付属図書館HP→図書館資料の検索→⑦ 国文学解釈と鑑賞 入力→「指定した条件にあてはまる資料はありません」→⑧ 解釈 スペース 鑑賞 と入力すればヒット→国文学解釈と鑑賞　至文堂　1936-2008継続中　７号館書庫５階　学術雑誌→「バックナンバーを見る」→⑨請求番号：９１０・Ｋ・１４をメモする。

2　古典文学関連の語彙の検索（特に平安文学関連）

お勧めのHP＝古典総合研究所→語彙検索　古典用語単語帳→

（例）＊「すさまじきもの」という語彙が平安文学作品中にどのようにでてくるかを、『枕草子』を含めて検索してみる。→土佐日記＝０　源氏物語＝０（すさまじき=12）宇津保物語＝０　枕草子＝２（すさまじき＝５）など

3　古典文学関連の花木鳥獣などの検索
お勧めのHPの紹介（記載省略）など。
4　古典文学関連の記録類の参照⇒東京大学史料編纂所データベース
歴史資料はもちろん、資料を読むための漢字のくずし字字典DBまである研究者に親切なDB紹介。
5　大学図書館などのデータベースの検索
閲覧したい書籍を検索するなどの基本に加えて、電子図書館の貴重図書（国宝・重文などもあり）などの閲覧。
（例）＊建礼門院右京大夫集、大和物語（重文）など→九州大学附属図書館所蔵貴重資料画像データベース＊今昔物語集（国宝）など→京都大学電子図書館貴重資料画像
その他　　風俗博物館～よみがえる源氏物語の世界～ HP　など。

（4）「古典文学基礎演習」でのIT利用についての受講生の感想（回収49）

＊演習時のOHC利用について
「機械の操作が気になって考察することが出来ない」「プリントだけで進行する方が集中できる」といった否定的な感想は、３名で、他の46名については、「プリントだけよりも、問題点が確認できるので良い」「機械の操作に慣れておく事は、将来のために良い」という肯定的な感想であった。

＊演習時のインターネット情報検索について
「機械の操作に時間がかかる分を他の考察に回した方が良い」「実践的な場面にまだ遭遇していないので紹介が早すぎた」という否定的な感想は３名で、「情報検索の方法を習うことが出来て役に立つ」「卒業論文などを書く際に有用な情報が得られると思う」といった肯定的な感想が46名であった。

②大学 日本語・日本文学科専攻科目「古代文学演習Ⅰ」・「古代文学演習Ⅱ」（対象３年生）・「卒業論文」（対象４年生）での実践

上記①「古典文学基礎演習」で学んだスキルは、３年次前期の「古代文学演習Ⅰ」では、演習に用いる『源氏物語』についての文献考察や解釈その他の発表資料作成、プレゼンテーションなどに活用されており、後期開講の「古代文学演習Ⅱ」では、卒業論文につなげる各自のテーマについて、さらに検索などの経験を積む。また、演習指導時には、『新編国歌大観』『源氏物語』『平安時代史事典』その他のCD-ROM利用やインターネット検索を即座に可能にする状態で臨み、時間中に出される疑問についての解決に役立てている。4年次の「卒業論文」においては、既出論文の調査や作品に関する種々のデータ収集その他、論文執筆過程で更に具体的にIT関連のスキルが活用されている。

２　ITを活用する古典文学教育の今後の課題と展望

国文学研究資料館データベースの一般公開や東大史料編纂所その他諸大学図書館の資料・データベースの公開などによって、利用する側の意思と多少のスキルさえあれば、研究初心の学生でも、様々な考察の素材をITを介して容易に手に入れることができるようになった。そして、大学の講義・演習時に具体的にその利用方法を経験をすることによって、実際に、学生が自分の研究や論文作成に利用することが出来るようになった。しかし、古典文学分野では利用頻度が最も多いと思われる『源氏物語』や『新編国歌大観』のCD-ROM（角川書店刊）は、書籍索引では結果に到達することが困難なさまざまな検索機能の利用価値が高いにもかかわらず、１枚が30万円近くする価額のせいで、利用を希望する学生の要望に十分に対応出来ていないのが現状である。

それらの古典文学資料は日本文化の基盤であり、大学の日本語・日本文学科の学生たちは日本文化の理解者・利用者のすそ野を拡げる役割を担ってもいるのであるから、国家的な見地から、文化政策の一環としてもっと入手しやすくするよう考えられるべきであろう。さらに言えば、中国文学における「寒泉」や「全唐詩電子検索系統」（上記桐島論文参照）のように、『源氏物語』や『枕草子』を始めとする日本を代表する古典文学作品の検索データベースは、国家的な文化政策として、インターネットで世界に向けて無償で発信されるべきものではなかろうか。既に古典文学のテキストについては部分的にはある程度ネット上に公開されてはいるが、使い勝手の良い検索機能を備えたデータベースにして系統的に公開して欲しいものである。

今回のこの共同研究によって、古代・中・近世の日本古典文学関連のデータベースと漢籍データベースなどの利用知識を相互に得ることが出来たことで、今後の古典文学教育・研究に利するところ大であった。

（以上、担当：古賀典子）

Ⅲ　日本近世文学分野

１　本学におけるIT活用の実践報告

ここでは日本近世文学分野および書誌学講義でのIT活用事例を報告する。近世文学分野は、現存する資料、文献も多く、授業ではこれらの資料類を収めた書籍（活字・影印）の利用方法を指導することが必須事項となっている。活字化された本文に関しては書籍利用が中心となるが、近時、デジタル化された資料の公開が進み、国立国会図書館をはじめ、国文学研究資料館、全国の大学図書館など各機関の提供する書誌データや画像類が増加しており、今回はこれらを授業に活用することを試みたものである。これらの活用に当たっては、デジタル情報のみが一人歩きすることのないよう、一方で実物に触れる機会を確保していくことが重要であると考え、その機会を設けるよう配慮してきた。尚、本文読解のための用例検索の中心は書籍に拠って行なうよう指導しているため、中国古典文学や日本古代文学分野に比して、補助的な利用に留まっていることを予め断っておく。

①大学　日本語・日本文学科専攻科目「書誌学」(対象４年生）での実践

（１）授業の目的・概要

和本の歴史、特性、構成要素を知り、和本の個性に適った取り扱いができるようになる。授業時は、江戸時代の写本、板本に触れて、テキストの記述内容を確かめながら、和本の扱いに慣れていくと同時に和本の知識を身に付ける。

（２）授業スケジュール

第１回	書誌学とは：書誌と書誌学、本を取り扱う態度
第２回	文字を読む：変体仮名とくずし字
第３～５回	書物の歴史と形態：①紙の出現以前と以後②書物の装訂③袋とじ〈演習〉
第６～９回	書物の種類：①写本と刊本②整版③活字版④刊本の検討方法
第10回	書物の各部位の名称：大きさ・冊数～小口
第11回	書物の各部位の名称：見返し～版式
第12回	書物の各部位の名称：欄・耳・のど～蔵書印
第13～14回	書誌調査　〈演習〉
第15回	レポート作成の注意、質疑応答

（３）上記「授業スケジュール」第４回「書物の歴史と形態：②書物の装訂」での活用例

ここでは、書物の歴史と装訂の種類を理解することが目的となる。装訂の違いを見分けられることと、種類ごとの特徴、書物の内容と装訂との関係等を理解させる。数多くの古典籍を用いることが望ましいが、本学の古典籍の所蔵数は少ない。また、特に中世以前の古典籍を見せることは困難である。この点を補うと共に、説明時間の不足をも補うために、国立国会図書館をはじめとする諸機関HP上に公開されている画像情報を利用した。

１.「国文学研究資料館」HP　ヴァーチャル展示「和書のさまざま」を紹介したプリントを授業中に配布。指定のテキストと合わせて説明を加える。

２. 学内ネットワークシステム「筑女ネット」の「書誌学」授業コース内に、同プリントを掲示。受講生は掲示したプリントに掲載したアドレスから、自由に国文学研究資料館HP「ヴァーチャル展示」にアクセスして、様々な装訂の例を確認する。

３. ２. と同時に、授業で紹介しておいた国立国会図書館HP電子展示室の「デジタル貴重書展」のアドレスを同様に掲示し、受講生の自由な閲覧を勧める。こちらの画像は、古い時代の貴重な資料が多く、保存状態、画像の鮮明さにおいても状態が良く、料紙の質感まで感じさせる点で活用価値が高い。

４. 画像データは、所詮は影のようなものでしかないことを認識させ、実物を出来るだけ多く、直接見るように指導。特に「九州国立博物館」４階「文化交流展示」(徒歩５分程度、学生証で入室可）を折々に訪れ、常設展示される古典籍類（国宝『栄

花物語』など。入れ替えあり）その他の展示資料について、成立時期・料紙・文字・装訂などを比較し、よく観察するよう指導する。

（4）上記「授業スケジュール」第６～９回「書物の種類」、第11～13回「書物の各部位の名称」での活用例

1.「書物の種類：刊本の検討方法」では、初印本と後印本など、参考資料を並べて比較するためにOHCを使用。それにより、同一部分や相違点、版木の傷や、訂正箇所などを確認し易くする。

2.「書物の各部位」では、本学図書館所蔵本他を用い、表紙（模様、色、意匠）、見返し、魁星印、刊記、蔵版目録、蔵書印他の部位をスキャナーで読み込み、スクリーンに映写して説明に使用する。同時に該書物を学生間に回覧させ、各部位の書物上の位置と、書物の種類による各部位の様式の違いの実際を、具体的な資料を通じて理解させることに利用した。この他、型押しなど凹凸で表現した表紙模様などの場合は、ライトを当ててデジタルカメラで撮影した（スキャナーでは模様が見えないため）。いずれも、小さな部分を拡大して提示できる点で、教室での授業には有効であった。

3. 2. と合わせて、他の図書館HPなどで公開されている画像データも利用する。授業では、項目の説明だけで時間が経過しがちであるが、それを補うために、学生が見易い電子展示類を紹介している。たとえば、九州大学附属図書館「讀本コレクション」(書誌的に重要な部分を鮮明な画像で提供している）や、国立国会図書館　電子展示室「蔵書印の世界」(著名な蔵書印から人物、文庫にまで繋がる知識が得られる）など。

4. この他「書物の種類」では、古活字版や整版印刷技法の説明などに、図録類の掲載写真をスキャナーに読み込んで使用し、反射光に弱いOHCの機能を補った。他方、OHCは、資料を動かしながら提示出来る点で優れており、例えば楮紙と雁皮紙との相違（光の反射、柔軟性）を容易に理解させることが可能である。できるだけ機器の特性を活かすよう留意した。また、板木というものを知るために、「立命館大学グローバルCOEプログラム」の「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」に公開されている「近世板木展」を紹介した。

②大学　日本語・日本文学科専攻科目「江戸の小説を読む」(対象１年生）での実践

講義説明資料の一部として利用した例である。江戸時代小説の種々を取り上げ、部分的ではあるが、それらの本文を読むことを通して、江戸時代の文学が持つことばの魅力や、描かれる世界の多様さ、絵画との関係を知ることを目的としている。2009年度前期から、早稲田大学図書館HP「古典籍総合データベース」画像資料を利用しながら、同時にいくつかの板

本を提示している。「読本」を取り上げた授業での利用例は以下のとおり。

・『南総里見八犬伝』本文を読んだ後、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」で公開されている画像資料により、『南総里見八犬伝』板本を見せる。また、口絵や挿絵、表紙の種々の意匠を示す。作者馬琴の草稿、挿絵部分などを示す。また、『南総里見八犬伝』の世界が、独立したモチーフとして他の印刷物に利用されている例を示す。カラー画像は多色刷りの美をよく伝えていて、授業には効果的である。尚、上記「古典籍総合データベース」は、「学校の授業などで一時的に利用する場合」の自由な利用を認めている（同DB「画像データの利用について」）ことから、当講義に利用させていただいた。

③大学　日本語・日本文学科専攻科目「卒業論文」（対象４年生）、「中・近世文学演習Ⅱ」（対象３年生）での実践

「中・近世文学演習Ⅱ」、「卒業論文」では１コマをコンピューター演習室での授業に当て、本稿Ⅰ・Ⅱでも示された文献検索類の他、書籍画像DB類の利用を指導している。指導に当たってはプリントを配布し、次の２点を十分に確認するよう指導している。⑴公開されている資料画像の利用については、各所蔵機関（図書館）の利用規則、凡例などをよく読み、ルールを正しく守る。⑵画像の利用、それに基づく文章や論文の公開に当たっては、許可を必要としたり報告を要する場合がある。扨、実際の利用面では、例えば『古浄瑠璃正本集』（影印）所収の作品を調べる場合（従来は九州大学で見るしかなかった）、作品によっては大阪大学附属図書館HP「電子化コレクション」の「赤木文庫」を利用するという選択肢も出てきたように、作品研究に不可欠な同時代資料を手軽に読める可能性が拡大してきている。2008年度「卒業論文」では、部分的に、「古典籍総合データベース」や、早稲田大学演劇博物館HP「デジタルアーカイブ・コレクション」を利用する学生も出てきている。

また、この他、漢文の訓読、入力方法を学んでから、漢文文献を積極的に使用する卒論も認められる。「古典文学基礎演習」から「古代文学演習」、「中国文学演習」との連携の成果であろうかと感じている。

２　ITを活用する古典文学教育の今後の課題と展望

以上に報告してきたことは全ての授業で実行できている訳ではない。教室環境によってできることは限定されている。全ての教室で自在にITを活用できる環境が整うことを望むものである。日本古典文学全体の問題についてはⅡに既述されたとおりである。ここでは、別の点に触れておきたい。「日本古書通信」（日本古書通信社）2009年７月号～９月号は、「変化著しい学術情報環境の中で」と題し、国文学・歴史学分野の「若手研究者」へのアンケートによる連載を組んだ。鈴木俊幸氏の「デジタル情報は現物の代替になりえない」とは、資料を扱う研究者なら誰もが意識して自ら重石としてきたことであろう。この点は学生指導においても最優先に伝えねばなるまい。その上でなら、本学のような地方大学にとって、関西、関東在住学生との間に大きく広がってい

た資料面での格差(時間的・経済的側面を含む)が縮小するという点は歓迎すべきことであろう。デジタルデータの増加により、却って実物の価値や求心力が高まるとも指摘されている。活字の時代には、変体仮名や崩し字を読む技術は専門分野や一部の趣味人のものとされたかもしれないが、デジタル画像の豊富な時代になることで改めて必要性が高まり、これを活かせる場面が増える可能性もある。技術革新が局面を大きく変えていくかもしれない。苦手意識にとらわれず、常に、動向に注目して見守っていかねばならないだろう。

（以上、担当：安永美恵）

おわりに

以上のように、本学日本語・日本文学科では、中国文学・日本古代文学・日本近世文学の各分野において体系的なカリキュラムを編成し、文学研究の基礎力（文学史の知識・読解力など）の上に、専門分野の特性が反映された最新のIT活用の教育を行っている。そして、学生たちの多くが四年間を通じて各分野のIT教育を受けてそれぞれのスキルを身に付け、それらを駆使してレポートを書いたり、学部生としては高い水準の卒業論文を仕上げたりしている。

今後も、各分野で専門分野でのIT活用に関する研究を深め、それらを基に三分野での連携を深めて学生たちへのより良いIT教育を実践していきたい。

なお、本研究は、筑紫女学園大学・短期大学部 平成20年度特別研究助成を受けたものである。

（きりしま　かおるこ：日本語・日本文学科　教授）
（こが　のりこ：日本語・日本文学科　教授）
（やすなが　みえ：日本語・日本文学科　准教授）